

ドゥルーズにおける個体化

—— 『差異と反復』から『意味の論理学』へ ——

吉澤 保

1. はじめに

本稿は、ドゥルーズの『差異と反復』（1968）、『意味の論理学』（1969）における「個体化 *individuation*」概念に焦点をあてる。「個体化」は『差異と反復』の中心的概念である¹。本稿が提示するこの概念は、ホワイトヘッド哲学を導きの糸として理解されたものである²。

ホワイトヘッド哲学の中心的概念である「現実的実質 *actual entity*」は、西洋哲学の歴史を根底から規定してきた実体概念への批判から構築されている。個体（特殊）は、専ら主語として普遍によって述語規定されるだけであり、それ自体述語として他の個体を規定することはない。このように個体を主語に、普遍を述語に排他的に割り振る考えは、ホワイトヘッドによれば、アリストテレスの「第一実体」に由来し、近代哲学はこの考えに基づいて展開してきた³。ホワイトヘッド自身は、デカルト、スピノザ、ライブニッツ、ヒューム、ロック、カントに言及するが、この批判の射程はこれらの哲学者に限らないだろう。主体に他ならない、ヘーゲルの「絶対精神」は、述語的規定を総合的に獲得してゆく。フッサールの「志向性」は、述語的規定を様々な実体に帰属させることであると言うことができよう。分析哲学の系譜では、仮に唯名論的であったとしても、実質的に個体に他ならない「変項」までも認めない立場はありえないだろう。個体＝主語、普遍＝述語という図式は、

¹ 本稿で扱うドゥルーズの著作の参照は、以下の略記で行う。

Gilles Deleuze, *Différence et répétition*[=DR], PUF, 1968.

- *Logique du sens*[=LS], Éditions de Minuit, 1969.

Gilles Deleuze et Félix Guattari, *Capitalisme et schizophrénie tome 1 : L'Anti-Œdipe*[=AO], Éditions de Minuit, 1972.

- *Capitalisme et schizophrénie tome 2 : Mille plateaux*[=MP], Éditions de Minuit, 1980.

- *Qu'est-ce que la philosophie ?*[=QP], Éditions de Minuit, 1991.

² 以下を参照。吉澤、「ドゥルーズにおける個体化 —— ホワイトヘッドとの関連で —— 」、『仏語仏文学研究』、第37号、2008、pp. 109-122.

³ Alfred North Whitehead, *Process and reality*, The free press, New York, 1978, part II, cha. I, sec. V.

あまりにも自明的であるがゆえに、無批判に前提されてしまう。

実体への批判は、その対蹠的な、生成（変化、流動、無規定なもの）の称揚に転化することが多いが、ホワイトヘッドはそのような反転に陥ることもない⁴。ドゥルーズもホワイトヘッドとともに、実体に基づく哲学への批判を行うとともに、その反動としての無規定なものをも斥ける⁵。

存在の一義性、永遠回帰、ひとの死

以上を念頭におきつつも、ここで本稿が試みるのはかなり限定的なことである。ドゥルーズの『差異と反復』、『意味の論理学』に対象を絞る。ドゥルーズ哲学における両著作の重要性は、今更多言を要すまい。前者は所謂前期哲学の集大成とも言うべきものであり、後者は所謂中・後期の哲学の方向性を決定付ける。「個体化」は『差異と反復』の中心的概念でありながら、『意味の論理学』ではほとんど言及されなくなる。この点をもう少し詳しく見ておく。

ドゥルーズは西洋哲学の歴史を自らの立場から評価する。ドゥンス・スコトゥス、スピノザ、ニーチェに見出された「存在の一義性 *univocité de l'être*」は、『差異と反復』において肯定的価値を付与される。これは「存在の類比 *analogie de l'être*」に対置させられている。「存在の類比」は「表象」の世界を特徴付ける⁶。「表象」の世界とは簡単に言えば、我々の世界——我々がそ

⁴ ホワイトヘッドは、完全に個性性を廃棄するのではなく、僅かな個性性（個体化）を残しておく。つまり二極間の、第三の道をとる。ニーチェやベルクソンでは流動性の側に傾きすぎているように見える。ホワイトヘッドこそがこの点に関して自覚的であった。 *Ibid.*, part I, cha. II, sec. I; part II, cha. I, sec. III et V.

⁵ 『意味の論理学』では、「形而上学」（分析的な仕方です語が主語を規定）、「超越論哲学」（総合的な仕方での規定）、「無底」の哲学（無規定）が批判される（*LS*, pp. 128-132 et 162-166.）。『差異と反復』でも、分析的規定はライブニッツに、総合的規定はヘーゲルに割り振られていた（*DR*, pp. 61-71.）。

動詞「である *être*」との対比での、接続詞「と *et*」への称揚を、ドゥルーズは好んで繰り返す（*MP*, p. 36, etc.）。「である」への批判は、「実体」への批判であり、主述形式の論理への批判に他ならない。この批判は既にホワイトヘッドによって明示的に行われている。「と」の称揚にも、ホワイトヘッド哲学との親和性を見ることがができる。

⁶ 「表象」こそ、『差異と反復』が批判する当のものである（*DR*, p. 337, etc.）。「表象」（現象 *phénomène*）、「意識」、「現実性」は、「現前化 *présentation*」（「仮想的存在 *noumène*」、「無意識」、「潜在性」と対比させられている。カント哲学に依拠しつつ（むしろそれをデフォルメする形で）、ドゥルーズは自らの哲学を繰り返す。強引に对照させるならこうなる。カントによれば、「現象」は、「物自体」が「知覚主体」を「触発」することに拠る。ドゥルーズは、「物自体」（「即自的差異」）をして「現象」に生成させる（*Ibid.*, p. 286, 305, etc.）。

ここに生きていると通常信じている世界——と言えよう。この世界は私と他なる物からできていて、それらはいずれも自己同一性によって特徴付けられている（つまり私と物は上で触れた実体ないし個体に他ならない）。人によってはそこに明示的に神も付け加わる。この世界は階層的に秩序付けられた諸概念（普遍）によって記述可能である。「実際、一義性の本質的な点は、《存在 l'Être》がただ一つの同じ意味において言われる [自らを言う] se dise ということにあるのではない。それは、《存在》が、ただ一つの同じ意味において、《存在》自身の個体化する諸差異 *différences individuanes* すべてについて、言い換えれば《存在》自身に固有な諸様相すべてについて、言われるということにある。《存在》はこれらのすべての諸様相に対して同じもの *le même* である。しかしこれら諸様相は同じものではない⁷。「存在」という語の慣用が問題となっているのではない。ドゥルーズによって「存在する」と言われるものは、「《存在》自身の個体化する諸差異」である。これは「個体化」に他ならない⁸。「個体化」は、「表象」の世界に与する私や物（実体）ではない。「存在の一義性」の議論で問題となっているのは、言わばドゥルーズによる価値付けであり、ドゥルーズの哲学そのものである。

「存在の一義性」はニーチェにおいて「永遠回帰」と結びつく。つまり「個体化する諸差異」こそが「永遠に」「回帰」ないし「反復」する⁹。「〈ひと on〉こそが永遠に反復を行う。ただしこの場合の〈ひと〉というのは今や、諸々の非人称的個性性と諸々の前個体的特異性 *singularité*、の世界を指示している¹⁰。引用からも分かるように、ここで言う「ひと」には特別な意味合いが込められている。簡単に言えば「個体化」と「特異性」である。これは当然「表象」の世界には属さない。「永遠回帰」の世界では「もはや自我 *moi* も《私 Je》も存在せず、それどころかそこでは個体化のカオスの君臨が始まる¹¹」。

以上の考えは死を巡る考えにも反映されている。ブランショの議論を援用

⁷ *Ibid.*, p. 53. 強調ドゥルーズ。「個体化する諸差異」は、「個体化する諸ファクター *facteurs individuanes*」と概念的に近い。これらが「個体化」を構成する (*Ibid.*, p. 327, 354, etc.)。

⁸ 歴史的には（特にスコラ哲学）、存在という語を神と被造物に同じ意味で適用するかどうかが問題であった（存在の一義性、類比性）。ただしドゥルーズの議論では神の存在は含まれていない。しかもそもそも存在ではなく、「個体化」がつまり生成が問題になっている。ホワイトヘッドは、神とその他の存在を等しく「現実的実質」と見なし、ドゥルーズよりも伝統に沿う形で「存在の一義性」を主張していると言っている（ただしこの場合も生成の一義性である）。

⁹ *Ibid.*, pp. 60-61.

¹⁰ *Ibid.*, p. 355 et 382.

¹¹ *Ibid.*, p. 332.

しつつ、ドゥルーズは、死には二種類あるとする。「私は死ぬ *je meurs*」ということよりも深い「ひとは死ぬ *on meurt*」ということが常にある。絶えずそして多様な仕方死ぬのは、何も神々だけではない¹²。前者の「私」の「死」は、通常我々が言う死に他ならない。後者の「死」の主体たる「ひと」は、上で見た「個体化」、「特異性」である。

『意味の論理学』でも、「存在の一義性」が、ドゥルーズによる肯定的価値付けと結びついている点では変わらない。そのおおよその意味に変更はないように見える。「存在の一義性が言わんとするところはこうである。存在は《声》であること、存在は自らを言うこと [言われること] *il se dit*、しかも、存在が言われるところのものすべてについて、一つの同じ〈意味 *sens*〉で自らを言う [言われる] こと。存在がそれについて言われるところのものは、同じものでは全くない。しかし存在は、存在がそれについて言われるところのすべてのものに対して同じものなのである。存在はそれゆえに、極めて様々な物に到来するすべてのものに対して、唯一無比の出来事として到来する。すべての出来事に対して、端的な出来事 *Eventum tantum* として到来する¹³。すべての「出来事」が同じものということではない。しかしながらすべての「出来事」は、同一の意味で「存在する」と言われる。『差異と反復』では、「出来事」のところに、「個体化する諸差異」即ち「個体化」が置かれていた。つまり「存在の一義性」の意味の語り方にはほとんど違いがないのに、「存在が自らを言うところのもの」に違いがある。「出来事」は『意味の論理学』では、「特異性」、「意味」と等値されている。重要なのは、ドゥルーズによる肯定的価値付けにおいて「個体化」があげられなくなることだ。

ニーチェの根本思想は、相変わらずドゥルーズによる価値体系の中心を占めている。「永遠回帰は、諸個体の、諸人格の、諸世界の永遠回帰ではもはやなく、諸々の純粋な出来事の永遠回帰である¹⁴。ただし引用より明らかなように、永遠に反復するのは、「出来事 (= 特異性 = 意味)」であり、そこに「個体化」は含まれていない。

二種類の死が認められている点でも変わりが無い。「このひとは、どれだけ日常的凡庸さのひとと違っていることだろうか。それは、非人称的で前個体的な諸特異性のひとであり、純粋な出来事のひとである¹⁵」。ここでも同じこ

¹² *Ibid.*, p. 149. 強調引用者。「他方で死は個体化である」(*Ibid.*, p. 333.)。他に *Ibid.*, p. 148.

¹³ *LS*, p. 210. 強調ドゥルーズ

¹⁴ *Ibid.*, pp. 206-207.

¹⁵ *Ibid.*, p. 178. 強調ドゥルーズ

とが確認される。

『差異と反復』では、「個体化」と「特異性」とが、肯定的に価値付けられていた。『意味の論理学』では、「特異性＝出来事＝意味」に肯定的価値付けが付与される。「個体化」はドゥルーズ哲学の玉座から落ちてしまったかのように見える。本稿が試みるのは、この点についての考察である。まず『差異と反復』における「個体化」の意味を整理する。続いて以上の成果をもとに、『意味の論理学』に向かう。

2. 『差異と反復』

2-1. 個体発生、卵割 —— 個体化ではないもの

まず、ありうべき誤解を解いておこう。「個体化」ということで、所謂個体発生を考えるなら、間違ふことになる。「個体化」は、一個の生物が誕生してから、成体になるまでの過程を言っているのではない。また、卵や胚が分裂してゆく過程を述べているのでもない。確かに『差異と反復』では、卵と胚は、あたかも「個体化」の例として示されているように見える¹⁶。しかし卵や胚はあくまで「個体化」に至るための範例の手掛かりにすぎない。念のためもう少し詳しく述べておこう。(1)「個体化」自体は、生体だけに起こるものではない。物理的なものもまた「個体化」によって生じている¹⁷。仮に卵、胚の分裂過程だけが「個体化」なら、物理的な「個体化」を全く説明できないだろう。(2) 後述するように、「個体化」は「潜在的なもの」の「現実化」に他ならない。卵や胚から出発しての分裂ないし成長は、専ら「現実的」なものから「現実的」なものへの移行に他ならない¹⁸。「個体化」は、「超越論的」なものである。「超越論的」なものは、「科学的」なもの、「経験的」なものから峻別されている¹⁹。つまりそれは直接観察可能というわけではない。逆に言えばそれゆえに、ドゥルーズは、観察可能なものたる卵、胚によって、この「超越論的」なものに迫ろうとする（「経験的」なものから「超越論的」なものが完全に排除されているとまでドゥルーズは主張しない。そもそも「超

¹⁶ DR, pp. 276-277, 322, etc. 『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』では、「器官なき身体（物体）*corps sans organes* は卵である」（AO, p. 26. MP, p. 202.）。『差異と反復』から『意味の論理学』への変化に対応して「卵」の使われ方も変化している。

¹⁷ *Ibid.*, p. 316 et 328.

¹⁸ *Ibid.*, p. 237 et 324.

¹⁹ *Ibid.*, p. 310.

越論的」なものこそ、「経験的」なものが成立する条件である。)(3) 上で見たように、「ひとは絶えず死んでいる」。つまり「個体化」は絶えず生じている²⁰。卵、胚においても「個体化」は常時繰り返されている。卵、胚はこの意味で「個体化」なのであり、より正確には「個体化」の連続の産物ではない。

2-2. 個体化

『差異と反復』で示される「個体化」の概略から始める。

「個体化」は、「潜在的なもの *le virtuel*」の「現実化 *actualisation*」である²¹。これは、「可能なもの *le possible*」の「実在化 *réalisation*」ではない²²。「潜在的なもの」は「可能なもの」ではない。それは既にそれ自体「実在的 *réel*」である。それはいまだ「分化 *différencié*」していないが、「未規定」ではない。それは既に「微分化」している。

「可能なもの」とその「実在化」についてもう少し述べておこう。或る個体（特殊、実体、実存）が、或る普遍（概念、形相、本質）によって規定されているとする。例えばソクラテスは、人間という普遍によって規定されている。この個体は、普遍という「可能なもの」が、「実在化」したものと考えることができる。あるいは普遍が個体化されたということができる。この個体（「実在化」）と普遍（「可能なもの」）とは似ている。ドゥルーズの言う「個体化」はこれとは全く異なる。「潜在的なもの」は「現実化」とは似ていない。このように、我々の経験の似姿として「可能なもの」を想定して、そこから我々の経験を説明するやり方こそが、ドゥルーズが一貫して批判するものである²³。

「潜在的なもの」とは「理念 *Idée*」のことである²⁴。「理念」は「多様体 *multiplicité*」である²⁵。「多様体」は以下の三つから構成されている。(1)「微分的諸要素 *éléments différentiels*」。(2)「それらの要素間の微分的諸関係

²⁰ *Ibid.*, p. 56.

²¹ *Ibid.*, p. 358.

²² *Ibid.*, pp. 272-273.

²³ ソクラテスは、様々な述語（人間である、アテナイ人である、悪妻をもつ、など）をもつ。これらの述語は（すべてではないにせよ）、プラトンのようにアイデアに由来するものとして性格付けることもできる（あるいは、デカルトのように生得性に由来するものとして、など）。あるいはこれらの規定は経験論的に性格付けることもできる。いずれにせよこのようなやり方では、個体、普遍という図式に留まる。

²⁴ *Ibid.*, pp. 269-270 et 357.

²⁵ *Ibid.*, p. 236.

rapports différentiels」。 (3) 「それら関係に対応する諸特異性²⁶」。このように「多様体」は「微分化 *différentiation*」によって成立している。上述したように「潜在的なもの」は既に「微分化」されている。

「潜在的なもの」の「現実化」とは、(2) の「微分的諸関係」を諸々の「質」、「種 *espèce*」に、(3) の「諸特異性」を諸々の「延長 *étendue*」、「部分」に、することである。これが「分化 *différenciation*」である²⁷。つまり「個体化」は「微分化」と「分化」からなる²⁸。

「多様体」の構成要素からもわかるように、「多様体」はまた「構造」でもある²⁹。それゆえに「個体化」とは、「構造」に対する「発生」である³⁰。また「多様体」は「問題的」でもある³¹。「個体化」は「問題」に対する「解」に他ならない。「解」はもちろん「問題」に似ていない³²。「潜在的なもの」とその「現実化」との非類似の関係は当然ながらここでも確認できる。このように「理念」は、「多様体」、「構造」、「問題」によってそれぞれの概念に応じて性格付けすることができる。そして「潜在的なもの＝微分化＝構造＝問題＝理念＝多様体」はその「現実化＝分化＝発生＝解」とは似ていない。

「理念」はしかしながら、それだけでは「現実化」されない。それは「個体化」の言わば客体的ないし素材的側面にすぎない³³。「現実化」を引き起こすのは、「強度」である³⁴。これこそが「個体化」の言うなれば主体的側面である。

上述したように「理念」は「潜在的多様体」であった。それに対して「強度」は「巻き込まれた多様体 *multiplicités impliquées*」である。それは「非対称的な *asymétriques* 諸要素」間の「関係 (比)」によってつくられている。「非対称的」とは、「強度」が入れ子構造をなしていることを意味する。「強度」を構成している「要素」は更なる「強度」に他ならない³⁵。「理念」が自ら「現実化」することは無いのに対して、「強度」のつくる「システム」は「個体化」を引き起こす。もう少し具体的に言えばこうである。「非対称的要素」は「暗

²⁶ *Ibid.*, pp. 237-238 et 356.

²⁷ *Ibid.*, p. 318 et 358.

²⁸ *Ibid.*, p. 317 et 358.

²⁹ *Ibid.*, p. 237 et 247.

³⁰ *Ibid.*, p. 238.

³¹ *Ibid.*, p. 210 et 218.

³² *Ibid.*, p. 274.

³³ *Ibid.*, p. 317.

³⁴ *Ibid.*, p. 316.

³⁵ *Ibid.*, p. 305 et 315.

き先触れ *précurseur sombre*」によって「連絡 *communication*」の状態におかれ、「カップリング」、「内的共鳴」、「強制運動 *mouvement forcé*」が生ずる。ここで「受動的自我」と「幼生の主体」とが構成される³⁶。上述したようにここにおいて「質」、「種」と「延長」、「部分」も生ずる。これこそが「分化」に他ならない。

何度か繰り返したように「潜在的なもの」にその「現実化」は似ていない。ここにも「差異」がある（「差異」は既に「理念」の中にも、「強度」の中にもあった）。これが「現実化」が「分化＝異化」である所以である³⁷。

既述したように、「個体化」において「理念」は「現実化」され、そのプロセスにおいて「質」、「種」や「延長」、「部分」が生起する。「個体」は、自らが「現実化」した「理念」を「表現」している³⁸。つまり「個体」は「微分的諸関係」と諸々の「特別な点 [特異点]」とを「表現」している。「個体」は自らが「包み込んだ」「諸特異点」を「凝縮」したものである³⁹。

3. 『意味の論理学』

3-1. 深さ＝物的なもの、表面＝非物的なもの

上述したように、『意味の論理学』では「個体化」は肯定的な価値付けをされていない。それでは「個体化」ないしそれに相当するものは全く述べられることはないのかと言えば、けっしてそうではない。この問題に向かう前に、『差異と反復』との目につき易い違いを一瞥することから始める。

ここでは、「物的なもの」と「非物的なもの」とが峻別されている。前者は「物体 *corps*」、「物の状態 *états de choses*」である。後者は「出来事」である。後者は前者の「結果」である⁴⁰。このような主張は、『差異と反復』でなされているようには見えない。確かに「実在的なもの」と「理念的なもの」との区別は示されている。しかしながらそれが『意味の論理学』における区別といかに関連するかは決して見易いものではない⁴¹。

³⁶ *Ibid.*, pp. 156 et 355-356.

³⁷ *Ibid.*, p. 273.

³⁸ *Ibid.*, p. 326 et 331.

³⁹ *Ibid.*, p. 331.

⁴⁰ *LS*, pp. 13-14 et la 2^e série.

⁴¹ 例えば *DR*, pp. 244-245. ここで「実在的なもの」と「理念的なもの」という二種類の「出来事」が示される。『意味の論理学』では「出来事」は専ら「理念的なもの」とされる (*LS*, p. 68.)。

そして「物的なもの」は「深さ」に、「非物的なもの」は「表面」に位置付けられる⁴²。「深さ」と「表面」という区別自体は、『差異と反復』でも見られないわけではないが、このような割り振りは見られないように思われる⁴³。また『意味の論理学』の「深さ」は更に、「未分化な」「無底」とされているように見える⁴⁴。『差異と反復』では、「深さ」は「無底」ではあっても、「未分化」とはされていないだろう⁴⁵。更に『差異と反復』では、「深さ」は、「強度」のトポスとされるが、この点では恐らく『意味の論理学』と一致しない⁴⁶。「強度」はむしろ「表面」、「出来事」の側に帰属させられる。

いずれにしても『意味の論理学』の見解は一見、所謂付帯現象説に見える。しかしながら、これは決して物理的決定論ではない。このあたりの議論は込み入っているが、「表面」における「準-原因」も確かに認められている⁴⁷。つまり「出来事」は単に「物体」によって決定されているわけではない。『意味の論理学』全体の議論や後のドゥルーズの議論も考慮に入れるなら、「準-原因」に関わる議論の重要性は、強調しても強調しすぎることではない⁴⁸。また「物的なもの」と「非物的なもの」との間の因果性についての見解は、両者の間の交流を否定するものでもない。両者はデカルトにおけるように排他的に考えられてはいない。「動的発生」の議論は、「深さから表面の生産へと直接的に向かう」ものである⁴⁹。

3-2. 個体の発生

上で見た『差異と反復』の議論を以下の四点にまとめる。この四点に分け

⁴² *Ibid.*, pp. 14-15, 217, etc.

⁴³ *DR*, pp. 72, 310 et 342-343.

⁴⁴ *LS*, p. 145, 165, etc.

⁴⁵ *DR*, p. 315.

⁴⁶ *Ibid.*, p. 298.

⁴⁷ *LS*, p. 115.

⁴⁸ 後の展開では、『意味の論理学』で言う「表面」は、「存立（構成）平面 *plan de consistance* (composition)」と捉え返されることになる（*MP*, p. 326.）。そしてこの「平面」こそが、言わば根源的なものとされる（*Ibid.*, p. 58.）。あるいは、『意味の論理学』で言う「表面」は、「深さ」における「物的なもの」（「器官なき身体」とともに、「平面」を構成することになると言う方が適切かもしれない。『意味の論理学』では、「動的発生」は、「深さ」から「表面」へと向かったのに対して、後の議論では、「平面」（ないし「器官なき身体」）上で、「出来事」が生成してゆくことになる。『意味の論理学』で言う「未分化な無底」は、「平面」とは区別された「カオス」としてもう少し明確に『哲学とは何か』で改めて規定されることになる（*QP*, pp. 44-45, 111-112, 195.）。

⁴⁹ *LS*, p. 217.

て、『意味の論理学』を見てゆくことにする。

- (1) 個体化は、潜在的なものからの現実化である。
- (2) 潜在的なものは理念である。多様体、構造、問題である。
- (3) 現実化は強度が引き起こす。
- (4) 現実的なものは潜在的なものに似ていない。

(1) 『意味の論理学』は二つの「発生」を論じている。「静的発生」と「動的発生」である。上で触れた「動的発生」が、「深さ」の「物体」から始めるのに対して、「静的発生」は、「表面」の「出来事」から出発する⁵⁰。「静的発生」は「存在論的発生」と「論理的発生」とに分けられる。「存在論的発生」は、「個体」と「人格」という二つの「発生」を扱う⁵¹。それに続く「論理的発生」は、「命題」の三つの次元（指示 *désignation*、表示 *manifestation*、意味作用 *signification*）の成立を扱う⁵²。つまり「静的発生」の第一の「発生」が「個体の発生」である。これは、ひとまず『差異と反復』で言う「個体化」に相当すると言える。そして『意味の論理学』でも「個体の発生」において「潜在的なもの」が「現実化」されると考えられている⁵³。

(2) 上述したように「出来事」はこの著作では、「特異性」、「意味」に結び付けられている。そしてこれらは「表面」に生起する「非物的な」ものに他ならない。つまり「理念的」なものに他ならない。そしてこれらは『差異と反復』で言う「潜在的なもの」の側に属するだろう。

「構造」は『意味の論理学』でも重要な役割を負う。ドゥルーズは「構造」が成立するための最低条件を三つあげている。(i)「少なくとも二つの[相互に]異質なセリーが必要である。一方は「シニフィアン」として、他方は「シニフィエ」として決定されることになる。」(ii)「これらセリーのそれぞれは、項から構成されるが、この場合これらの項は、それらがお互いに保つ関係によってのみ実存する。これらの諸関係に、あるいはむしろこれら諸関係の価値に、極めて個別的 *particuliers* 諸出来事が、言い換えるなら構造において指

⁵⁰ *Ibid.*, p. 217.

⁵¹ *Ibid.*, p. 140 et la 16^e série.

⁵² *Ibid.*, la 17^e série.

⁵³ 「これら特異性は「ポテンシャル *potentiel*」の中に割り振られているが、「ポテンシャル」はそれ自体としては《自我》も《私》も備えていない。しかし「ポテンシャル」は、自己を現実化し、自己を実現しながら、《自我》と《私》とを生産する。[この際] この現実化の諸形象は、実現されるものたるポテンシャルには全く似ていない」(*LS*, p. 125.)。『差異と反復』でも「ポテンシャル」は「潜在的なもの」とほぼ同義で使われる(*DR*, p. 240.)。「ポテンシャルティ *potentialité*」は「理念」の第三の構成要素において生起する。つまり「潜在的なもの」に属する (*Ibid.*, p. 226.)。

定可能な諸特異性が、対応する。まさに微分計算法において、微分的関係の値〔価値〕に対して特異点の割り当てが対応するようなものだ。」(iii)「これらの二つの異質なセリーは、パラドックス的要素に向かって収束する⁵⁴」。

『差異と反復』では厳密には、二つの「多様体」が、即ち二つの「構造」が問題であった。「理念」と「強度」である。『意味の論理学』ではこの二つは一元化されているように見える。上記の(ii)については、2-2 で見た三つの構成要素を確認できる。「微分化」は、『意味の論理学』ではそれほど強調されなくなっているが、それでもこれが斥けられるに至ったわけではない⁵⁵。

「意味」は「問題的」である⁵⁶。つまりここでも「個体の発生」は「問題」に対する「解」の一つである。

(3)『差異と反復』では「個体化」を引き起こすのは、「強度」とされた。『意味の論理学』ではどうか。(2) で見たように、「個体発生」の素材となるものは「特異性」である。直接的には「諸セリー」における「収束」が「個体発生」の条件となる⁵⁷。もう少し詳しく言うところのことである。「個体の発生」はこの著作では、「実現 effectuation」とされる。「物体」に「出来事」を「述語」として帰属させることが、「実現」である⁵⁸。「世界」に現れる「個体」は、「深さ」の「物体」と等しいとされている⁵⁹。「深さ」の「個体」は、その「世界」とともに発生する⁶⁰。「特異性」はあくまで「非物的」なものに、「理念的」なものにすぎなかった。ここで「実現」することで、「物体」と結びつく。「受肉」とは「実現」のほぼ言い換えである。

『意味の論理学』では、「強度」という用語はほとんど使われなくなる。しかし僅かに使われている箇所からは、「表面」の生産に関わっていることがわかる。更に、実質的には同じことであろうが、「特異性の延長」や「ポテンシャル」と概念的に近い意味で使われていることもわかる⁶¹。「個体の発生」に

⁵⁴ LS, pp. 65-66. ドゥルーズ強調。

⁵⁵ *Ibid.*, p. 148.

⁵⁶ *Ibid.*, p. 69 et 127.

⁵⁷ *Ibid.*, p. 133.

⁵⁸ *Ibid.*, pp. 134-136.

⁵⁹ つまり現象的物(相対的物)は、物それ自体(絶対的物)に等しいと想定されている。現象学的立場にたたないなら、この想定はそれほど自明なことではない。ホワイトヘッドはこれを本格的に論ずる。*Process and reality*, II, IV, IX, pp. 126-128.

⁶⁰ LS, p. 134.

⁶¹ 「セリーの形態の基礎は、表面の性感帯にあるが、それは、この性感帯が特異性の延長によって規定される限りである。あるいは同じことになるが、ポテンシャルのない強度の、差異の割り振り——最大値と最小値を伴う——によって規定される限りである(セリーは、別のセリーに依存する諸点の周囲で停止する)。つまり

は「表面」の存在は欠かせない。更に上で見たように、「ポテンシャル」も同様である。「強度」が「個体の発生」を引き起こすというのは恐らく正しくないにせよ、「個体の発生」の不可欠な条件であるのは確かであろう。更に詳しくは後で取り上げよう。

『意味の論理学』では上述したように、「個体の発生」は諸々の「セリー」の「収束」を条件とする。『差異と反復』では「収束」ではなく「共鳴」が「個体化」の条件である⁶²。「共鳴」は「強度」において生起する⁶³。ドゥルーズはどちらの著作でも「収束」と「共鳴」とを区別している⁶⁴。『意味の論理学』の「個体の発生」が肯定的価値付けをされていないのは、この点からもわかる。上述したように「個体の発生」は、「共鳴」ではなく「収束」を条件とする。

(4)『差異と反復』同様、『意味の論理学』でも「潜在的なもの」にその「現実化」は似ていない⁶⁵。つまりこれは、「個体の発生」は『差異と反復』で言う「可能なもの」の「実在化」ではないということである。「実在化」は「可能なもの」に似ている。

「個体」は常にその「世界」とセットで発生する⁶⁶。そして「潜在的なもの」である「特異性」が、「個体」によって「表現される」点では『差異と反復』と変わりはない。「個体」が「特異性」を「包み込む」という点でも変わらない⁶⁷。

3-3. 個体化＝出来事

以上で『差異と反復』の「個体化」と『意味の論理学』の「個体の発生」とを照らし合せた。(3)の「強度」や「収束」(「共鳴」といった点を除くなら、概ね両者の間に違いはないように見えた。ひとまずは『差異と反復』の「個体化」は、『意味の論理学』では「個体の発生」として論じられるに至ったと考えることができる。前者では肯定的価値付けの中心にあったのに対し

性感帯上のセリーの形態は、等しく特異点の数学にも、あるいは強度量の物理学にも、基礎付けられている」(Ibid., pp. 261-262. 他に Ibid., p. 255 et 269.)。「強度」は後の著作では頻出し、ドゥルーズ哲学を特徴付ける重要な概念の一つである(例えば MP, p. 11, etc.; QP, p. 25, etc.)。

⁶² DR, p. 317 et 357.

⁶³ 「理念」の場合にも「一種の共鳴」が生起することがあるという(Ibid., pp. 356-357.)。

⁶⁴ LS, p. 204.

⁶⁵ Ibid., p. 30, 120 et 142.

⁶⁶ Ibid., p. 135.

⁶⁷ Ibid., p. 133 et 135.

て、後者ではむしろ、ドゥルーズ哲学からすれば批判すべき対象に成り果てている。「個体」は「超越」の世界に帰属するものに他ならない。

しかしながら以上の結論はあまりにも一面的すぎる。『意味の論理学』で言う「個体の発生」が、『差異と反復』の「個体化」に完全に対応していると考えすることはできない。

本稿の冒頭で見たように、『差異と反復』では、「存在の一義性」における「存在」、「永遠回帰」の主体は、「個体化」であった。『意味の論理学』では、「特異性＝出来事＝意味」がそれに代わる。「個体化」を規定する性格付けは、「出来事＝特異性＝意味」に専ら賦与されることになる。

(1)『意味の論理学』では「反復」はほとんど強調されなくなるが、僅かな言及から、「反復」の主体は「出来事」であることがわかる⁶⁸。

上述したように、『差異と反復』では「存在の一義性」が、「存在の類比」と峻別され、肯定的価値を与えられた。「個体化」は当然前者に帰属する。前者は「遊牧的配分」によって特徴付けられる。後者は「定住的配分」である⁶⁹。『意味の論理学』でも同様に「遊牧的配分」と「定住的配分」という対概念は堅持される。「遊牧的配分」は、「特異性」のつくる「表面」を、つまり「開空間」を特徴付ける⁷⁰。

『差異と反復』では、「可動的 mobile」なる語が、「個体化」を形容するものであった⁷¹。『意味の論理学』では、「特異性」を規定するものの一つである⁷²。

(2)『差異と反復』における「個体化」の特徴で、主体性に関わるものを確認しておく。

(i)「非人称的」である（「特異性」が「前個体的」とされる）。つまり「表象」の世界に属する「私」、「自我」はそこにはない。

(ii)「質」、「種」と「延長」、「部分」とが生起する。「時空的力動」（これは「初次的意識」でもある）が生起する⁷³。「幼生の主体」、「受動的自我」が生起する⁷⁴。

つまり「個体化」には言わば高度な主体性（分析的であれ総合的であれす

⁶⁸ *Ibid.*, p. 68 et 195.

⁶⁹ *DR*, p. 388.

⁷⁰ *LS*, p. 76 et 124.

⁷¹ *DR*, p. 331 et 387.

⁷² *LS*, p. 124.

⁷³ *DR*, p. 284.

⁷⁴ *Ibid.*, p. 356.

すべての規定が述語的に帰属させられるような主体性)はない。しかし全く主体性を欠いているわけでもない。

『意味の論理学』の「出来事＝特異性＝意味」の特徴を対照させる。

(i)「非人称的」、「前個体的」である。つまり「人格」も「個体」もない。「私」も「自我」もない。「意識」もない。

(ii)「表面」をつくる。「表面」は「意味の超越論的場」である。ここで現象学の概念が援用されている。ドゥルーズは、サルトルがこの「場」を「非人称的」なものとしたことを評価しつつも、そこに限界を認める。サルトルにおいてははまだ「意識」という形態が認められている。この点が批判される⁷⁵。「超越論的哲学」ということでカント批判主義哲学、フッサール現象学が考えられている⁷⁶。「超越論的場」という語は明確に規定されているとは思われない。とは言えフッサール現象学(とその系譜)への参照は明らかである。「現象学的還元(超越論のエポケー)」によって開示される「超越論的主観性」が、念頭におかれているであろう⁷⁷。いずれにせよ確かなのは、「意味の超越論的場」という表現からわかるように、「意味」に対して言わば僅かな主体性がそこに認められていることである⁷⁸。ドゥルーズは「意味」に「人

⁷⁵ 『意味の論理学』では現象学(とその系譜)により大きい力点を置くようになる。この著作は一つには、現象学的概念を取り込む形での、ドゥルーズ哲学の再編成ということもできるかもしれない。あるいは本歌取りの相手が(少なくともその力点が)、カントからフッサールへ移ったと言うこともできよう。カント的構図(「物自体」、「表象」)から、フッサールの構図(「内在」、「超越」)への移行は見やすい。

⁷⁶ LS, p. 129.

⁷⁷ 例えば以下参照。Husserl, *Idées directrices pour une phénoménologie*. Gallimard, 1950, § 32, 33, etc. この「意味の超越論的場」は、後に「内在平面」と捉え返される(QP, I, 2.). 周知のようにフッサールの「内在」(「超越」に対する)は「超越論的主観性」とほぼ外延的に等しい。

「超越論的なもの」は(認識の、というよりは)経験の条件に関わるだろう(しかもドゥルーズの場合、単なる「可能な経験」の条件ではなく、「現実的経験」の条件——「充足理由」——が求められなければならない。DR, p. 287 et 364.). それは、単に「経験的」なものでもなければ、「経験的」なもの引き写しでもない。この点は「可能なもの」の批判と結びつく(LS, p. 120 et 128.).

⁷⁸ しかしながらドゥルーズは、デリダが批判するような、主体への意味の現前を認めていたわけではない。ドゥルーズの言う「意味」は主体に対して言わば正対していない。そもそもそれは様々なパラドクスと不可分である(第五セリー)。何よりも「意味＝生成」は、「決して止まることなく、同時に二つの方向にあり、常に現在を逃れ、不従順な物質の同時性において、未来と過去とを、より大 le plus とより小 le moins とを、余分 le trop と不十分 le pas-assez とを、一致させる」(Ibid, p. 9.)。このパラドクサルな規定は、デリダの「差延」を想起させる(Derrida, « La Différance », in *Marges*, Éditions de Minuit, 1972, pp. 13-14.)。この点で両者を比較できよう。「差延」が、現象学の中心的概念(意識への意味の現前)の「脱構築」に主に基づくとする

格」も「個体」も認めないが、それを決して完全なる無機性、物質性にまで還元しない。

このように「表面」は「意味の超越論的場」に他ならないが、それは「動的発生」の議論で言う「形而上学的表面」に相当する。「形而上学的表面」の発生は「自我」の発生と無縁ではない。既に「深さ」（「器官なき身体」）において「自我」は僅かながら生起している。「物理的表面」の発生において「自我」はその「独立性」を獲得する⁷⁹。ここからも同様なことが確認される。

(3)「共鳴」、「強制運動」は、『差異と反復』で「個体化」の発生に不可欠な条件とされた⁸⁰。『意味の論理学』でも、「共鳴」、「強制運動」は、「表面」の成立に必要な条件とされる⁸¹。

既述したように「強度」は『差異と反復』で「個体化」の発生を引き起こすものとされた。『意味の論理学』では既に触れたように、「強度」は「表面」の生産に関わるものであった。もう少し言えば、「性的表面」の生産のみならず、「性的表面」から「形而上学的表面」の生産にも関わるとされる⁸²。

このように「共鳴」、「強制運動」、「強度」は、『差異と反復』では、「個体化」を引き起こす契機に他ならなかった。これらは、『意味の論理学』では、「表面」の生産に関わる。「表面」こそがまさに、「特異性＝出来事＝意味」の場に他ならない。『差異と反復』ではその都度生起する「個体化」の言わば内面が、トポスの役割をつとめていた。『意味の論理学』では言わば、個々の「個体化」の内面が、すべて取り集められて、一つの面に引き伸ばされている。「個体化」の一時的なトポスから、「特異性＝出来事＝意味」が生起する「表面」というトポスに代わる。

3-4. 個体＝出来事 —— 反—実現

次いで『意味の論理学』の言う「個体」は、必ずしも否定的とばかりは言えない。

なら（少なくともその重要な点においては）、ドゥルーズの「意味」概念は、全く出自が異なるように思われる。一つにはホワイトヘッドの「エポック的時間」概念（それと「出来事」概念）との関連が考えられる。ゼノンのパラドックスを巡る考察から、ホワイトヘッドは奇妙な時間概念 —— ベルクソンのそれとも異なる —— に辿りつく。

⁷⁹ *LS*, p. 221, 229 et 237.

⁸⁰ *DR*, p. 155 et 356.

⁸¹ 「幻影が発達するのは、共鳴が強制運動を誘導し、強制運動が基底の諸セリーをのみ出で、一掃する限りにおいてである」（*LS*, p. 279. 強調ドゥルーズ）。「幻影」は第30セリー参照。簡単に言えば「幻影」は「特異性＝出来事＝意味」である。

⁸² *Ibid.*, p. 88.

(1) 既に見たように、『意味の論理学』の「個体の発生」は、『差異と反復』の「個体化」にほとんど対応するばかりであった。確かに「個体化」ではなく「個体」とされることで、『差異と反復』にあった「プロセス」としての側面は抜け落ちている。しかしながら『意味の論理学』の「個体」の規定に、ドゥルーズのいう「永遠回帰」としての「反復」の意味合いを読み込むことは不可能ではない。つまり『差異と反復』でそうであったように、『意味の論理学』でも「個体」はその都度「発生」しているということを読み込むことも不可能ではない。アリスは「むしろ個体」であり、「人格的同一性」を失ったものである⁸³。ドゥルーズの定義からすれば、「人格」こそが最も批判されるべきものである。それこそが「世界」が変わっても、同一的であり続ける⁸⁴。『差異と反復』で批判されていたのも、まさにこの「人格」である。「個体」はむしろその「世界」とともに一回的なものにすぎない。「個体」ならば生成しつつ永遠に反復することが可能である。確かにライブニッツは「現実世界」を一つとするが、ドゥルーズはライブニッツを援用しつつも、「発散」する複数の「世界」の可能性をむしろ認める。『意味の論理学』の記述は、ライブニッツ的な「個体」概念（それと「世界」）を提示しつつも、そこに「永遠回帰」的な「個体化」概念を読み込むことをも許容している。

(2) 『意味の論理学』では「個体」は「諸セリーの収束」を条件として「発生」するとされた。そしてこの「収束」は即ち、ライブニッツが言う「共可能性」とされた。つまり「セリー」、「特異性」のレベルで、「共立可能性」、「共立不可能性」は存在するということである。しかしながら後の議論では、「共立不可能なもの」が生じてくるのは、「個体」、「人格」、「世界」とともにであり、「出来事」間では生じないとされる⁸⁵。先に述べた議論とは矛盾するようではありながら、ここでは「収束・発散」と「共可能性・共不可能性」とは同一視されない。「発散」はあるものの、「出来事は連絡」している⁸⁶。

「従って問題は、いかにして個体が、自らの〔個体という〕形態を越えて、そして、一つの世界との統辞論的結合を越えて、諸出来事の普遍的連絡へ、つまり、論理的矛盾の彼方においてだけでなく、非論理的共立不可能性の彼方においても、分離的総合の肯定へ、到達できるのかを知ることになる。そのためには、個体が自己自身を出来事として把握する必要がある

⁸³ *Ibid.*, p. 11 et 142.

⁸⁴ *Ibid.*, p. 137.

⁸⁵ *Ibid.*, p. 208.

⁸⁶ *Ibid.*, p. 206.

だろう。また、個体が、自己において実現される出来事を、自己に接ぎ木される別の個体として把握する必要があるだろう。その場合、当の出来事を個体が理解し意志し表象するなら、別のすべての出来事を個体として理解し意志せざるをえないし、別のすべての個体を出来事として表象せざるをえなくなるだろう。各個体は諸特異性を凝縮する鏡のようなものになるだろうし、各世界は鏡の中の隔たりになるだろう。これこそが、反—実現 *contre-effectuation* の究極の意味である⁸⁷。ここで述べられている「個体」は、上で見てきた「個体」とは異なる。これこそが『差異と反復』の「個体化」を継承するものと言えよう。そしてこれは『意味の論理学』では「反—実現」とされ、ドゥルーズの価値体系で重要な役割を担わされている⁸⁸。「実現」が、「深さ」の「物体」に「出来事」を帰属させることであるのに対して、「反—実現」は、そうではない形での、生のあり方である⁸⁹。「出来事」は、その「理念性」からは離れつつも——その意味で「実現化」するわけであるが——、「物体」に述語として帰属することもない。

結論

『差異と反復』の「個体化」は、「存在の一義性」で言う「存在」であり、「永遠回帰」の主体であった。つまりドゥルーズによって肯定的に価値付けられていた。『意味の論理学』では「個体化」はこの座から消える。ここで「個体化」は「個体の発生」として論じられるようになり、最終的に「人格（私）」へと至るものとされる。つまり否定的に価値付けられる。

しかしながら「個体化」は完全に「個体の発生」に還元されるかと言えば決してそうではない。それは『意味の論理学』でむしろ「出来事＝特異性＝意味」として論じられるに至ったといえることができる。『意味の論理学』は、一方で「表象」の世界への道筋を「個体の発生」として論じつつも、他方で「個体化」としての「出来事＝特異性＝意味」をも示している。そしてそれだけでなく「個体＝出来事」の可能性（「反—実現」）をも示唆している。

あるいはより適切に言うならこうなろう。『差異と反復』では「個体化」が

⁸⁷ *Ibid.*, pp. 208-209. *contre-effectuation* は、この接頭辞の含意から、通常の「実現」に対抗する「実現」、それと逆の「実現」、それを補う「実現」などと解することができる。

⁸⁸ *Ibid.*, p. 176.

⁸⁹ *Ibid.*, p. 134. 『哲学とは何か』でも同様な意味で肯定的に価値付けられている (*QP*, p. 150.)。

「特異性」とともに肯定的に価値付けられていた。『意味の論理学』では、「個体化」の肯定的側面は、専ら「特異性」の側に集められることになり、残りの否定的側面は、「個体の発生」として記述されることになる。そもそも「個体化」はそのような両義性を含んでいた。「個体化」だけで終るなら、まさに「生成」であり、この意味で肯定的価値付けの側にある。「個体＝出来事」という「反－実現」へと繋がる。しかし存続して主体になるなら、つまり述語を物に帰属させるなら、「個体」、「人格」へと至ることになる。「表象（超越）」の世界へと至る。

『差異と反復』から『意味の論理学』にかけて何が変わったのか。

(1) 『差異と反復』でも既に「深さ」と「表面」とは対照させられていた。しかしこの「表面」は「個体化」のプロセスの、言わば内面において生ずるものにすぎなかった。『意味の論理学』では、「表面」は「個体化」から切り離され独立する。「深さ」に対して相対的独立性を獲得する。「個体化」は先ほども見た通り、「個体の発生」と「特異性＝出来事＝意味」（「反－実現」）へと分岐する。

(2) 『差異と反復』では「理念」は「潜在的なもの」であり、「深さ」にあった。「表面」に位置付けられることはなかった。「表面」は専ら「現実的なもの」であった。『意味の論理学』では「理念」は「表面」上に位置付けられる。同様に「理念」の属性である「潜在性」も「表面」上に位置付けられる（「理念」の他の属性である「多様性」、「問題性」、「構造的性」も同様である）。

(3) 『差異と反復』では、「理念」は「深さ」にあった。これは逆に言うと、「深さ」は「微分化」しているということであった。「深さ」は更に「強度」のトポスでもあり、入れ子構造をなし、「無底」であった。つまり既に「未分化」ではない。『意味の論理学』では、「深さ」から「理念」も「強度」もなくなる。「強度」はむしろ「表面」（その生産）に関わる。「深さ」は「無底」であるが、「未分化」とされる。そこには「物の状態」、「物体」（「器官なき身体」）が定位される。

以上の三点よりこう考えることができよう。確かに『意味の論理学』においても「深さ」という場所は堅持されるものの、そこには「物的なもの」が位置付けられるだけにすぎない。『差異と反復』の「個体化」は、その個々の言わば内面が引き伸ばされ「表面」にさせられる（あるいは「個体化」は限りなくマイクロ化されて「表面」になる）。「表面」の役割は、『差異と反復』のそれと比べものにならないほど大きくなる。『差異と反復』での主要概念

（「個体化」、「理念」、「強度」）は、『意味の論理学』ではむしろ「表面」上で一元化される⁹⁰。「空間的」切り分けは再編成され、そして何よりも各トポスへの割り振りが大きく変わったのである。『意味の論理学』では、「物的なもの」は「深さ」に位置付けられていたが、後のドゥルーズ哲学では「物的なもの」も「平面」に還元され、あるいは「平面」上に位置付けられる。最終的には（『哲学とは何か』）、以下の三つに整理される。1. 「カオス」（「深さ」を継承する）、2. 三種類の「平面」、3. その上の三種類の「要素」（各種類の「平面」に対応する）⁹¹。

「出来事＝特異性＝意味」はそれ自体既に「個体化」でもある。後のドゥルーズはこの点に関してもっと明確になる。例えば『千のプラトーン』では、「個体化」は二種類に分けられる。一つが「人格」、「主体」、「物」、「実体」に属する「個体化」である。もう一つは「此性 *hécécité*」の「個体化」である。「此性」はドゥンス・スコトゥスに由来するが、ドゥルーズは、「出来事＝特異性＝意味」に属する「個体化」を指すために用いている⁹²。『差異と反復』で言う「個体化」の肯定的側面は、依然として堅持される⁹³。

何故ドゥルーズ哲学はこのように変わったのか。この変化はドゥルーズ哲学の本質に関わるのか。これに答える準備はまだできていない。ここで扱った変化は、『差異と反復』から『意味の論理学』への変化の一部にすぎない。

⁹⁰ 後のドゥルーズも以下を認める。1) 『差異と反復』の「強度」は、「深さから生じるものとして提示された」点で間違っている。2) 『意味の論理学』でも、使われている概念自体は『差異と反復』のものと同様で変わらない（「多様性」、「特異性」、「強度」、「出来事」、「無限」、「問題」、「パラドックス」、「比例 *proportions*」）。ただしこれらの概念は『意味の論理学』では、「表面」という観点から練り直されている。Gilles Deleuze, « Note pour l'édition italienne de *Logique du sens* », in *Deux régimes de fous*, Éditions de Minuit, 2003, pp. 59-60.

⁹¹ *QP*, p. 111, 204, etc.

⁹² *MP*, p. 310 et 318. 『哲学とは何か』でも、「此性」は「出来事＝概念」の言い換えとして用いられている（*QP*, p. 26.）。ただしこの著作では、「個体化」という語は、「物の状態」、「物」、「物体」よりも更に言えば超越性の度合いが一つ進んだ意味で用いられているように見える（少なくとも「物」よりは）。『意味の論理学』で言う「個体」や「人格」の意味に近いだろう。つまり専ら否定的な意味である（*QP*, p. 116, 129 et 204.）。また、『哲学とは何か』の「個体化」は、「科学」に属するものとされるが、『差異と反復』の「個体化」の否定的側面しか継承していない。

⁹³ 檜垣立哉、「ドゥルーズ哲学における〈転回〉について——個体化論の転変」、『ドゥルーズ／ガタリの現在』所収、平凡社、2008年、pp. 360-379. この論稿は、ドゥルーズ哲学における「個体化」概念の問題性を見事に示す。そしてこの点においてドゥルーズ哲学の生成には「大きな転回」があるとす。

この変化の全体について評価を下すには、他の重要な論点（例えば『差異と反復』の時間論ないし反復論の行方）も視野に入れながら、より包括的な考察を行う必要がある。

本稿で扱った変化は、如何なる意味を持つか。これについてなら次のような指摘が可能であろう。簡略化して対比するなら、『差異と反復』では、「個体化」自体が場所になるのに対して、『意味の論理学』では、「特異性＝出来事＝意味」とは区別される「表面」という場所が認められる。『差異と反復』の意図に反するが、「個体化」は、到達すべき目的として「個体」を——ひいては「表象」の世界を——想定していると受け取られかねない。「個体化」への強調を避けることは、このような目的論的想定を斥ける効果がある⁹⁴。「特異性＝出来事＝意味」が「個体化」に代わるが、それらは自らをトポスとすることはできない。そうすれば「個体化」と実質的に変わらなくなる。むしろそれらが生成する場所があるなら、件の目的論は回避できるように思われる。そして場所たる「表面」（「平面」）とそこで生成する要素（「出来事＝概念」など）との関係については、『哲学とは何か』で改めてより詳しく論じられる（「平面」とその要素との本性の違いなどが明示される）。

⁹⁴ ドゥルーズは、『個体とその物理学的・生物学的発生』のシモンドンに多くを負うことを認めつつも、結論においては異なると明言している（LS, p. 126.）。プロセスとしての「個体化」に力点をおく点では一致しつつも、ドゥルーズは例えば、次のような目的論的序列化（予定調和）を受け入れることはできない。「個体——〈自然〉から生じた増幅器的転送 *transfert amplificateur* ——を通じて、諸々の社会は一つの世界となる」（Gilbert Simondon, *L'Individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Grenoble, Millon, 2005, p. 335.）。シモンドンとの関連は以下の手堅い論稿を参照。廣瀬浩司、「個体化の作用からアナーキーな超越論的原理へ」、『情況』、情況出版、2003年4月号、pp. 208-225.